

令和7年度 府中町立府中中央小学校 学校自己評価表【最終評価】

学校教育目標	自ら伸びる 「問い直し」を大切にして、教育活動に山場を創り、「生きた言葉」で自覚化して、他者と関わり協力して乗り越えていく	経営理念 ミッション 子ども観 ビジョン	「学校(地域)は子どもが育つ土壌である」(自ら伸びる意思の形成をなす土壌) 【使命】地域と共に児童も大人も共に成長していく機会・場を創造する学校 【子ども観】子どもは発達の当事者であり、未来の大人として敬意を払うべき存在 【経営展望】「教師こそ最大の教育環境」を自覚し、日々の教育活動の中に子どもを見つめる“まなざし”の研鑽
--------	---	-------------------------------	--

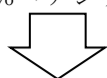
ビジョン (中期経営目標)実現に向けての現状(進捗状況)と今年度の位置付け	本校は、この4年間、「自ら伸びる」を学校の方向目標とし、児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく教育活動を創造してきた。昨年度は、経営理念「学校は子どもが育つ土壌である」を追求していく学校として、「本校は子どもをどのような存在として見るのか」という“子ども観”を明確にしてスタートしたが、中間評価の時点で「教師がめざす姿を子どもに当てはめようとしているのではないか」との課題が見えてきた。これは、本校の求める「(教育活動の中に)一人一人の発達の可能性を見出しながら、学級・学年・学校での関わりの中で、自らの根っこを太らせていく教育」をねらっていくための本質的な課題であると捉えた。それゆえ、後半は、この課題をより意識しながら日常的教育活動を行った結果、「教師がめざす姿を子どもに当てはめようとしている」という課題が克服されたとは言えない状態ではあるが、教師自身の子どもや環境への目の向け方、捉え方、考え方が少しずつ変容してきた。たとえば、「すぐに目に見える成果を求めず待つ姿勢を大切に」「子どもの言葉を丁寧に受け止める」「自分の見取りを他者の見取りに照らして考える」などである。このような“たくさんの可能性の種をもつ子どもの芽を引き出し、伸びる手助けをしたい”と願う教師の“まなざし”の研鑽は、本校のビジョンである「教師こそ最大の教育環境」に深く関わる教職員集団の学習の核であると考え。また、これらの教師の“まなざし”を問い直しつつ、子ども主体となる話し合い活動等を意図的に仕組んでいく中で、学級への適応感が向上し、合意形成をしながら自分たちで暮らしを創ろうとする子どもが増え、学級づくりの基盤である支持的風土は出来てきた。しかし、学習集団として成熟していくためには、失敗を許容し合う“やさしい”関係性が構築された支持的風土を創って終わりではなく、自分たちが本当に追求したいことに自分をつけることのできる“集中のかかる学級”へとフェーズを上げていく必要がある。失敗したり、思いや意見がずれたりコンフリクトが発生した時こそを問い直し(探究)の契機とし、互いの考えを交流させ、授業や行事の中で“学びの集中感・緊張感”を高めていくことが「自ら伸びる」意思を形成することにつながると考える。このことから、今年度は、教師が子どもたちの中にある顕在化していない“ずれ”を感じ取り、働きかけることができるかどうか意識を向け、教師の“まなざし”の研鑽を図り、一人一人の子ども言葉や態度の奥にある感じ方・思い方・考え方を謙虚に見取り、それらが学級の関わりの中で深化していくことで、次第にそれらが学級の感じ方・思い方・考え方となっていくような学習集団へと成熟させていく。そして、子どもの育ちを喜び合う暮らしを創りながら、教師の有りようを問い直していくことで、より深く、経営理念「学校は子どもが育つ土壌である」を追求していく。
--	---

学校経営の柱に係る考え方

a 「生きた言葉」が生まれる学級づくりを支える学年経営(学年経営力)	学級・学年づくりが「自ら伸びる意思」の形成につながっていくには、日々の教育活動に子どもたちがどう心を寄せ、重ねているかを見取る教師の“まなざし”が大切である。そこで、今年度は「じまんの俳句」の活動を学級で行うのではなく、“暮らしの中で「じまんの俳句」が生まれる学級を創る”との考え方に転換していく。具体的に言うと、学級活動を重ねながら、学級を語りたくなる場、聴いてもらいたくなる場と意味付け、子どもたちの願いが凝縮していくところに価値を見取り、“その学級の良さ・価値(学級らしさ)”を追求する学級目標(方向目標)と日々の暮らし(体験)を充実させていく「はちの子の心得」(体験目標)を連動させ、「じまんの俳句」に顕れる“その子や学級の良さ・価値(その子らしさ・学級らしさ)”を問い直し、高めていく。そのために、各学級の子どもが心を寄せていることを見取り、価値ある人・もの・こと(材)との出会いをいかに支援できるかを学年団で検討を重ねていく。
b 「問い直し」のサイクルを意識した授業づくり(教師の授業力)	学びの創造が「自ら伸びる意思」の形成につながっていくには、教師が一人一人の子ども言葉や態度の奥にある考え方を丁寧に見取り、「発達の可能性」を見出していく“まなざし”が大切である。教師はその“まなざし”をもって学級活動(柱a)や行事(柱c)を授業構想に生かしながら、授業の中で子どもが本当に追求したい課題や問題を見定め、子どもの失敗や思い・考えの“ずれ”といったコンフリクトを問い直しの契機として仕組み、子どもたちの考えを引き出し、また、子どもたちから出た考えを打ち砕いたり、発展させたりしていくことによって、子どもたちが自分をかけて考えを追求し、“自分らしさ”をつくり出していく集中感・緊張感を体験する授業づくりを追求する。
c 自己認識を問い直す行事づくり(児童自治)	行事の創造が「自ら伸びる意思」の形成につながっていくには、教師も子どもも「めざす姿を子どもに当てはめようとする」のではなく、「今どこにこの子の主体を確立していく可能性があるか」を子どもの取り組み姿の内に見取っていく教師の“まなざし”が大切である。そこで、学級会や学年総会(柱a)、日々の授業(柱b)、地域行事等(柱d)で培った“子どもの内面”がその子らしく表現され、表現することで更に“その子の内面”が創られていくような行事を子どもと共に創造していく。それにより、子ども自身が立ち向かうものを自覚し、「自らの殻を破り成長したい」との切実な願いが醸成されていくような“集中感・緊張感”の高まる過程を重視して、“その子らしさ”“その学級らしさ”“その学年らしさ”が大切にされる児童自治を支援する。
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり(地域との協働)	環境の創造が「自ら伸びる意思」の形成につながっていくには、教職員だけでなく、子どもを取り巻く保護者や地域の大人たちが、互いの子どもを見る良き“まなざし”を交流し、その思い・考えの“ずれ”といったコンフリクトを契機に、“子ども理解を学び合う関係”に成熟していくこと、つまり、本校が“子どもを真ん中にした地域づくり”の核となっていくことが大切である。そのために、子どもが学校で学んだことを地域で発揮できるような場を学校と地域が協働して創造し、そこで見られる子どもの姿で大人が交流することを契機にして“子どもを取り巻く大人たちも学び合える生涯学習の場”を醸成する。

評価計画(中期経営目標を設定して1年目)

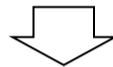
A 中期(3年間)経営目標	B 短期(今年度)経営目標	C 目標達成のための方策	主な成熟度		現状	D 評価指標	目標値(%)	E 評価結果			
								10月		2月	
								達成値	評価	達成値	評価
a 支ま「ええ生きた学級づくり」が生まれる	団俳暮「生きた学級づくり」が生まれる	・学級目標と「はちの子の心得」を連動させ、“その学級らしさ”を追求する。 ・「じまんの俳句」で“その学級らしさ・学年らしさ”の耕しを見取り、表現によって追求する。	4段階	その子らしさ、その学級らしさがどう見えているか、何が期待できるか等、学年を超えて交流する教職員集団	○	・「はちの子アンケート」学級集団の適応感 ・「はちの子の心得」振り返りの記述が学年の目指す姿を現している ・「教師アンケート」自らの“まなざし”を問い直す教師の割合	80%	91%	A	93%	A
			3段階	学級の子どもが何に心を寄せているのか、価値ある人・もの・こととの出会いについて支援・指導を熟議する学年			80%	90%	A	93%	A
			2段階	自分の感じることを、思っていることを言葉で表現できる学級			90%	69%	B	78%	B
			1段階	語りたくなる、聴いてもらえる支持的風土のある学級							
b 授業「問い直し」の研習	れる中授業・緊張感が生まれる	・「個別最適な学び」で見取った子どもの感じ方・考え方を「協働的な学び」の中で生かし、集中感・緊張感を生み出すための授業研究	4段階	子どもたちが自分をかけて考えを追求し、自分をつくり出す	○	・「はちの子アンケート」自らの学習を調整しようとする児童の割合 ・標準学力調査の目標値に達していない児童の割合 ・「教師アンケート」自らの“まなざし”を問い直す教師の割合	80%	93%	A	94%	A
			3段階	教師は子どもが本当に追求したい課題や問題を見定め、問い直しを仕組み、考えを発展させていく。			3割以下	—	—	120%	A
			2段階	教師は個々の感じ方・考え方を見取り、子どもや教材の中から課題等をつくり出し、考えを発展させていく。			80%	68%	B	88%	A
			1段階	支持的風土の中で自分の考えを拓いていく。							
c 行事「自己認識を問い直す」	づの自過分り程本位大か切らに主した形行成事へ	・主体の確立をめざした“あいさつ”の醸成 ・リーダー育成と人と関わる喜びを得る縦割り活動(異年齢交流) ・授業や暮らしで得た力をつなげ、生かす行事の創造	4段階	他者との関わりの中で自分の存在を実感し、新しい自分を見出していこうとしている。	○	・「はちの子アンケート」主体感(あいさつ・縦割り活動・行事) ・「はちの子の心得」振り返りの記述が自己の目指す姿を現している ・「教師アンケート」自らの“まなざし”を問い直す教師の割合	各80%	93%	A	95%	A
			3段階	子ども自身が立ち向かうものを自覚し、自分が自分の行動の主体であることを認識している。			80%	97%	A	93%	A
			2段階	自分のできる方法で自らを表現し、それを受け止めてもらうことで主体感を得ている。			90%	96%	A	94%	A
			1段階	他者の支援等によって行動(あいさつ)している。							
d 児童や大人の集いが	イ大人が学び合うコミュニティ	・地域の人・もの・こととつながる教育活動の創造(全学年) ・子どもを取り巻く保護者や地域の大人たちが「子ども理解を学び合う」場の創造 ・学校での学びを地域で生かせる地域と協働した行事の創造	4段階	子どもを取り巻く保護者や地域の大人たちが子ども理解を学び合っている。	○	・教育活動の満足度(保護者アンケート) ・地域参加・社会貢献への意欲(6年児童アンケート) ・大人が集う活動の充実度(地域アンケート)	85%	94%	A	93%	A
			3段階	子どもの学びを発揮できる地域行事を大人たちが協働して創造している。			80%	89%	A	96%	A
			2段階	子どもを取り巻く大人同士が、子どもへの“まなざし”を交流している。			70%	98%	A	91%	A
			1段階	各種便り等を見て学校や子どもの様子を知ろうとしている。							



F 結果の分析・解釈・変容（中間 10月）

<p>a</p> <p>○教師は児童の「生きた言葉」を大切にしながら、学級経営・学年経営に取り組んでいる。そのため、行事や儀式の児童代表の言葉等で、児童がノー原稿で自分の言葉で語る姿が見られた。アンケートや記述の振り返りでは、肯定的な意見が多く見られた。</p> <p>また、学級目標や「はちの子の心得」を決める際、話し合い活動を通して合意形成しながら自分たちの言葉で創り上げているため、「自分たちで決めた目標」という意識が高まり、肯定的な意見につながったと考えられる。目標を達成するために自分は何を頑張るのか、自分事として考える児童の姿が見られた。</p> <p>●しかし、中には、自分事として捉えられず、学級目標や「はちの子の心得」が意識できていない児童もいる。方向目標である学級目標と体験目標である「はちの子の心得」に児童たちが適切なタイミングで振り返ることができているか。帰りの会でやっている振り返りが形骸化していないか問い直す必要がある。また、教師自身も児童とともに暮らしを創る目標と児童の姿を照らし合わせて見取ることができているか、問い直すことも課題である。</p> <p>○“まなざし”と見取りの研修を通して、“まなざし”を意識する教師の割合が増えた。それぞれの見取り方で自ら伸びようとする児童の姿に価値付けをした。</p> <p>●職員室での情報を共有する際、何か問題が起きた時に児童の話題が出たり、事務連絡のみになっていたりして、十分に交流ができていないこともある。また、終わったことに対しての問い直しがないままの場合や自分のクラスのことしか見えていない場合もある。上手いかなかったことに対して吐露したり、どうしたらよかったを意見し合ったりできるような雰囲気作りも必要なのではないか。</p>	<p>b</p> <p>○●「はちの子アンケート」の「勉強では分からないところがあったら、友達のやり方を参考にします」、「勉強が分からないとき、できている友達をお手本にしてやってみよう」という項目では、4段階評価で4段階の「いつもしている」と3段階の「ときどきしている」の割合が半々だった。この結果を踏まえ、我々教師自身が集中感・緊張感がある授業をどう捉えているかアンケートを取ってみた所、「児童一人ひとりが自分事として課題に向き合う姿」や「指示がなくても自らの課題に向けて取り組む姿」、「児童一人一人が前のめりになっている姿」といった回答が多く見られた。この結果より、1学期時点では、個に焦点を当てている教師が多いことが分かった。</p> <p>また、6月末に実施した「教師のまなざしアンケート」では、「児童の思考の”ずれ”を生み出したり、座席表等で児童の思いや願い、困り感を見取り、授業づくりに生かしたりすることができた」という項目で肯定的な評価が68%であった。教師の中には、児童の「根っこを育てる」ために、授業だけでなく日々の学校生活のなかで、児童の見えない部分を見取ろうとしていることが分かった。少数意見ではあったが、「授業で培った力と学級会による合意形成や行事で培った力が融合した状態」という回答も見られた。授業とは、「児童一人ひとりが真剣に教材と向き合い、自分の考えや思いを他者に問いかけながら学び合い、互いに高まり合っていくものである」と考えられるため、学級会による合意形成や、俳句の句会、行事等での集団として高まりを授業にも還元していきたい。</p> <p>さらには、「見取ったことをどのように授業に生かすのか」、「どのように価値付けるのか」、「座席表をどのように活用すればいいのか」といった教師の困り感を知ることが出来た。全教職員がどのような”まなざし”を向け、児童の見えない部分である「根っこ」をどのように太くしていくのか、現段階では模索している状態である。</p>	<p>c</p> <p>○昨年度の児童生徒会議において、「あいさつ」に力を入れたいと児童たちから提案があった。今年度その提案をもとに、執行部が中心となって「あいさつ」に取り組み、「はちのこ あいさつ ペコチャレ隊」を行った。さらに、執行部がその取組の分析を行い、全校児童に「はちのこ meet」で成果と課題を伝えた。「はちのこ あいさつ ペコチャレ隊」は、分析・改善を行いながら継続している。</p> <p>また、児童生徒会議で提案のあった中学生との「あいさつ運動」を実施した。児童は、中学生のあいさつを参考に、いつもより多くあいさつをしていたと肯定的にとらえていた。</p> <p>○7月から本格的にたてわり活動を行い、6年生は全員がリーダーとして緊張しながら活動に取り組んでいた。このことにより成功体験を積んだ6年生は、達成感を味わう様子が見られた。その一方で、なかなか人前に立てずに困っていた6年生もいたが、方法を考え直したり、他の6年生にコツを聞いたり、試行錯誤を繰り返しながらあきらめることなく活動に取り組んでいた。6年生が、担当の先生に自らどう運営したらよいかと相談に行く姿も見られ、アドバイスをもらって挑戦する姿が見られた。</p> <p>また、2学期より学年のめあてを設定して取組を進めたり、月に一度の反省会も取り入れたりし、さらなるたてわり活動の活性化を図っている。</p> <p>●たてわり活動全体を通しては、次年度のリーダーである5年生を育てていくという視点が弱かったため、サブリーダーとは何をしなければならぬのかということ、生徒指導部や学年部でも話し合い、6年生の姿を目指して自分達にできることを探すように5年生への意識づけを行っている。</p> <p>○今年度運動会では、どのような運動会を目指すのか、各学年で話し合った。そして、主体的に取り組むたいと児童から提案があり、開・閉会式の司会や応援合戦の内容を児童に任せた。そのため、児童にとってもやらされた行事ではなく、自分達で創ったものになり、集中感・緊張感のある行事となった。このことは、はちの子アンケートの「自分のめあてにむかって、活動しましたか。」という項目で「した」と答えた児童が「時々した」と答えた児童の倍以上であったことから分かった。また、子供を信じて待つ姿勢を教師自身もつことにより、教師のまなざしも磨かれた。</p> <p>○夏休みの研修では、子どもの内面をその子らしく表現し、さらに内面を創っていくように、三宅SCによる「雑談力」の研修を組んだ。さらに、教師のまなざしを培う研修として、潮SCによる「アタッチメント」についての研修を行った。</p> <p>●「授業や暮らしで培った力をつなげ、生かす行事」とは何か、「何を培った力と呼ぶのか」というのかという視点が弱く、生かし切れていない実態が見られた。次回の学習発表会では、どんな力をつけたいか、日頃培った力をどんな場面で生かせるかを明確にして、行事に取り組めるように声かけをしていきたい。</p>	<p>d</p> <p>○PTAでは、6月に「中央小大人の集い場」として、アロマお作り体験ミニ講座を行い、たくさんの保護者に参加していただき、保護者同士が気軽に話し合ったり相談したりする場を設定することができた。また、CS 夏祭りも8月に開催し、児童や保護者だけでなく地域の方々も巻き込みながら、盛大な祭りを開催することができた。その他にも、読み聞かせボランティアグループ Sweet による全校一斉読み聞かせを実施したり、7月には町Pフェスに6年生や4年生児童の有志が参加したり、1年生のスタートカリキュラムや5年生の防災キャンプ等の学習支援等においても、保護者や地域の方々に参加していただいたりしながら、子どもたちが学ぶだけでなく大人たちも学ぶ機会が増えてきた。</p> <p>○学校行事や授業サポートに参加された保護者や地域に行ったアンケートでは、「参加してよかったと思う100%」「今後も参加したいと思う98%」であった。「楽しみながら一生懸命活動していた」「周り協力していた」「面識がない子どもがあいさつをしてくれた、気さくに話しかけてくれた」といった子どものよさがあげられており、「子どもたちの姿から自分（大人）も、楽しみながら真剣に取り組んでいきたい」「日ごろの先生方の苦勞を感じる」といった意見が寄せられた。</p> <p>○夏季休業中には、教職員対象のCS研修会を行った。12名のCSメンバーや保護者に参加してもらい、「地域とともに児童主体で何ができるか」について協議した。互いの考えを聞きあいながら、ともに学校を核とした地域づくりについて活発な意見交流がなされた。</p> <p>○「親の力」を学びあう学習プログラム講座を9月に2、4年、にこにこ学級で実施した。参加した保護者からは「他の保護者や先生方と交流できて有意義だった。」という意見が多く寄せられた。</p> <p>●アンケートなどで参加された保護者や地域の方の意見は聞くことができたが、大人同士が交流することには至っていない。また、行事への参加者も一部の方にとどまっている。寄せられた意見をフィードバックする場や、大人同士が子ども理解を交流する場を増やしていきたい。</p>
<p>○夏季研修では、上記の内容も踏まえ、教務部と共同で教師の”まなざし”と見取り、座席表の活用について研修を行った。全教職員でどのように児童に”まなざし”を向けるのか、見取るのか、価値付けていくのかを共有することができた。11月中旬に第2回の教師の”まなざし”アンケートを実施予定である。今後も、学年部会等でそれぞれの「見取り」や「まなざし」について、交流を続けることが研鑽につながると考えている。</p>		<p>○上述のように、集中感・緊張感のある授業を生み出すためには、児童に対してどのような”まなざし”を向けるのかということも大切ではあるが、何よりも教師が教材と向き合い、自分自身に問いかけることが大切である。その上ではじめて、児童の考えや困り感に対して適切な見取り・価値づけができるようになる。</p> <p>本校は10月に広島県小学校理科大会で授業提案を行うため、夏季研修として全教職員で教材研究や指導案検討、模擬授業といった研修を行った。</p> <p>本校は理科専科の職員がいるため、理科を教えたことがなかったり、理科の授業づくりの経験が少なかったりする教職員が多い。そのため、理科授業の楽しさや教材研究の仕方等を全教職員が教材研究から指導案を作成した上で指導案検討を行うことで、全教職員が自分事として捉え、活発な議論を行うことができた。</p> <p>年度当初、若手教諭の中には、教材研究の方法が分からないといった声も聞かれたが、研修を通して、教材研究の仕方、大切さ、何より楽しさを実感したようである。研修では、「目の前の</p>	

	<p>児童を想定する」をテーマとして、教師がやりたい、絵に描いた授業を行うのではなく、目の前にいる児童の実態に応じた授業展開、環境設定がいかにかも実感することができた。評価指標にはないが、定期的に教職員に「主体的に研修に学んだか。」と「他者とともに学び合う楽しさを味わうことができたか。」というアンケートをしているが、夏季研修後は肯定的評価が多く、参加した教職員にとって実りのある研修であったようである。</p> <p>○昨年度から研究通信を週に1・2回程度発行し、公開授業や部会の研修、SD研修のみで自己研鑽を済ませるのではなく、柱bに関わらず柱a～柱cを横断した内容にすることで、共に高め合える職員集団にしていきたいと考えていた。今年度は、若手がベテランに単元で押さえるべき内容や授業づくりについて指導を仰ぐ姿や、授業後には共に授業を振り返ったりする姿が見られるようになってきた。</p>		
--	--	--	--



G 改善方策案			
<p>a</p> <p>○日々の振り返りが形骸化しないよう、タイミングを見計らって、問い直しをする機会を設ける。朝の会、帰りの会、学活等の時間に児童自身が自分の伸びや課題について考えたり、学級の伸びや課題について交流したりすることで、自分の良さ学級の良さを高めていく。</p> <p>職員室で情報共有をする際、児童の成長の過程を語ることで、学年部の中でも、児童が今何を頑張っているのか、何に困っているのか、何に心を寄せているのかに気付くようにする。日頃の会話を大切にすることで、教師同士どのように子どもを見ているのかを共有し、教師のまなざしを研鑽することにつながる。考える。</p> <p>○2学期は行事も多いため、教師も機を逃さないようにする。児童がどう伸びようとしているかを見取り、価値付けていくことで俳句作りへと生かしていけるようにする。</p> <p>1学期に学校全体を通して、支持的風土は出来上がっている。だからこそ、お互いの良さを認め合う、自己肯定感を高めることにつなげられるように句会の形だけで終わらないように価値付けていく。まずは、教師が児童の作品の思いに共感し、共に考えを広げる、まさに教師の“まなざし”を意識して句会に取り組んでいきたい。</p>	<p>b</p> <p>○柱cの「あいさつ」をしている感じている児童と教師の“ずれ”を埋めていくために、柱aの「生きた言葉」が生まれる学級づくりを支える学年経営とも関連させて授業づくりを行っていく。支持的風土は醸成されつつあるが、もう一度、相手に届く声で自分の考えを発表しているか、友達の発表に反応しているか等、協働的な学びの視点からも、相手に敬意をもって学習に臨んでいるかを教師自身が意識して授業を行う必要があると考えられる。</p> <p>11月には学習発表会があるため、日々の生活（あいさつ、返事）や授業（発表、反応）、行事（表現）を関連付けて意図的な指導を行っていく必要があると考えられる。また、教師自身が範を示すのはもちろんのこと、児童の目指したい姿を意識して価値付けていくことが大切だと考えられる。</p> <p>○指導部会や研究通信、ミニ研修等で「集中感・緊張感のある授業」「子どもの失敗や思い・考えの“ずれ”といったコンフリクトを生み出す授業」について研究を深めていく。指導部会は月に1回あるが、研究部で研修するのはもちろんのこと、学年団に報告会で終わることのないように、「集中感・緊張感のある授業」「子どもの失敗や思い・考えの“ずれ”といったコンフリクトを生み出す授業」を対話する時間を設定するようにする。教師が「考え続ける」そういった職員集団にしていく。</p> <p>○今年度は、研究通信で研究主任自身が悩んでいることや困っていることもお知らせしていく。中堅やベテランも試行錯誤している姿を共有することで、若手も授業等の悩みを共有し合い、共に高め合える集団にしていきたい。</p>	<p>c</p> <p>○「あいさつ」をしていると感じている児童は93%と高いが、教師の実感としては、自らあいさつをしていく児童は少ない。このズレをどのように埋めていくか、どのような取組をしたらよいか、児童と一緒に考えていきたい。</p> <p>○たてわり活動では、サブリーダー育成の視点をもって、5年生がリーダーの役割を担い、6年生がアドバイスを3学期ではなく、早めにもつことで、お互いリーダーへの自覚を芽生えさせる機会をもつ。</p> <p>○子どもも主体で行事を進めていくために、どのような仕掛けが必要かを考え、整理していく。また、日々培った力をどう生かせるかを、教員が明確に考えをもち、児童に意識させながら、行事に臨ませる。</p>	<p>d</p> <p>○高学年を中心に地域行事への参加が増えてきた。今後は、下級生や次に繋げる意識付けをしながら活動を促していく。</p> <p>○OPTAが主体的に活動を行ってきている。本部と連携を深めながら、今後の活動の充実を図っていく。</p> <p>○小中連携教育充実事業研究会を契機に、地域ぐるみの防災教育について、より深めていく。</p>

学校の大きな方向性に照らして（問い直し）：

子どもたち自身がどう伸びたいのか、子どもの言葉や態度の奥にある考え方を見取っていく教師の「まなざし」の研鑽は、学校行事や職員研修等を通して、若手からベテランに至るまで意識はしつつあるが、子どもが頑張っていることや困っていることや心を寄せていること等の子どもの姿や成長過程や変容を語り合う際、教師同士が子どもの内面をどのように見取るのかを共有しながら教育的価値を問い直すまでには至っていない。また、子どもも主体となる話し合い活動等を意図的に仕組み、合意形成を図っていく中で、支持的風土のある学級集団や学習集団は醸成されてきており、授業だけでなく日々の学校生活の中で、子どもの見えない内面を見取ろうとする更に深化した考え方をするようになった教師もいる。しかし、どのように「まなざし」を向ければよいのか分からないという課題も同時に浮き彫りになった。これは、教師自身が子どもの姿を価値づけるタイミングがずれたり適切でなかったりと教師自身が子どもの内面を見取る目がまだ十分でなかったりすることが要因であると考える。

そこで、今年度後半は、子どもたち自身が本当はどう伸びたがっているのかを見極め、子どもが自らの殻を破り成長するタイミングを適切に見取ることができるようなしなかけを学習や行事において仕組む。また、放課後や学年会等において子どもの成長や頑張っていること等について語り合ったり、子どもの抱えている課題をどう解決していくかを相談し合ったりすることを通して、子どもの成長を喜び合ったり頑張りを認めたりする等、子どもの変容について教師が職員室で気軽に話題にして情報共有できる場としていく。そうすることにより、子どもを適切に見取る教師の「まなざし」の研鑽に引き続き取り組んでいく。

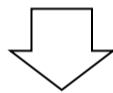
<p>a</p> <p>○各学年が「はちの子の心得」の振り返りを問い直した結果、児童自身が自分・学級の伸びや課題について考え、自分の良さや学級の良さを高めようとする学級が増えた。具体的には、挙手だけでなく、「エピソードを思い出して発言する」「はちの子の心得に向かい、自分宣言を作成する」「振り返りを語る」など、児童の生きた言葉で表現している。最初は、「～ができた・できなかった」という発言から「今日一日を振り返ると、～の行動が～の成果につながる。～の姿につなげたい。」といった語りも生まれた。それを評価することで、他の児童にも広がり、より具体的な振り返りに変容した。そのため、児童が何に心を寄せているのか見取り、価値付ける機会が前期より増えたと考える。</p> <p>○職員室で情報共有をする際、「～が難しい」「～に困っている」「上手くないかな」等、教師としての悩みや振り返りが自然に共有できるようになってきた。それは、職員室で日頃の会話を大切にし、教師同士どのように子どもを見ているのかを児童の成長の過程を語り合っているからだと考える。それぞれの視野が広がることで、「まなざし」も深まり、様々な角度から児童を見ることができている。</p> <p>●情報共有ができていても、その子らしさ、学級らしさがどう見えているか、何が期待できるか等、学年を超えた教職員の交流はまだできていないと考える。教職員の経験年数も様々で、児童につけたい力やそのための方法や手段に対する捉え方も様々である。同じ方向性を共有する時間の確保が必要だと考える。</p> <p>○「じまんの俳句」では、年度当初に比べ、児童と対話する、児童がどう伸びようとしたのかといったことを見取り、対話・共感する教師が増えてきた。各学年で工夫をしながら「じまんの俳句」に取り組み、児童がどう伸びようとしているか見取り、価値付けることができた。例えば、名前をふせた句会を行い、選んだ俳句のどんなところが気に入ったかを交流することで、友達の俳句（体験・思い）に共感することができた。</p> <p>また、児童の姿を価値付けたり、共感したりしながら学級創りと俳句作りを関連させる教師が増えてきた。</p> <p>⇒教師の“まなざし”との関連</p> <p>学習発表会の俳句を作成した際には、個人だけでなく学級・学年の弱さに向き合い、どんな「殻」を破ろうとしたのか、学級会の合意形成と関連させて取り組むことができるようになった。それにより、友達の思いに共感する児童も多く見られるようになり、俳句に足りないものや付け加えたらよいものを児童同士が自ら意見交換し始める姿が見られるようになった。</p> <p>⇒「じまんの俳句の活動を行う」というより、暮らしの中から児童の内なる思いが「じまんの俳句として表出する」ようになってきた。</p>	<p>b</p> <p>「問い直し」のサイクルを意識した授業を構築する研究推進の主な成熟度は、3段階の「教師は子どもが本当に追求したい課題や問題を見定め、問い直しを仕組み、考えを発展させていく。」だと位置づけられる。</p> <p>○児童が安心して「自ら伸びよう」とするためには、学級適応感が高くなければならない。安心して学ぶ環境が整ってこそ「自ら伸びる」意思が形成されていく。学級会で合意形成を図る話し合い活動の取組により、支持的風土の醸成を図ることができた。支持的風土が高まると、児童が困っていること・疑問に思っていることをつぶやくことが増え、児童の思考・疑問に沿って授業づくりを展開することができた。より一層安心して学べる「自ら伸びる」環境を整備できるようになった。</p> <p>○座席表で児童の思いや困り感を見取り、児童同士の考えの「ずれ」を本時の目標として授業づくりに生かすことができるようになってきた。また、座席表に児童の思いや困り感を見取っていくことで、単元の始まりと終わりであったり、1ヶ月間の伸びであったり中・長期的な児童の伸びを把握することができた。単元の初めには、身につけたい力をループリック等で児童と共有することで、児童が自分自身で学びを振り返り、自己調整して学習することができた。ループリックを作成する際には、児童の記述を教師が想定する大切さに気付き、確かな見取りを行い、深い学びにつなげることができた。</p> <p>○県小学校理科教育研究大会の開催校として、理科で協働的な学びと個別最適な学びの一体化の充実を図ってきた。協働的な学びと個別最適な学びの一体化の充実を図るためには、「個で考えをもつ」⇒「他者と協働しより妥当性の高いものにする」⇒「個に還元する」といった流れが大切である。「個で考えをもつ」ためには、児童の願い・疑問を本時のめあてとし、自己の考えを整理するためにはノートやワークシート、タブレット、具体物等で自己選択・自己決定する場を仕組むことの大切さを実感することができた。個で考えをもつことができることで、自然と児童同士で協働する姿も見られるようになった。本校の子どもも観「子どもは発達の当事者であり、未来の大人として敬意を払うべき存在」のもと、研究授業において、児童に付けたい力やどんな姿を目指すのかを授業者が研究通信や暮会で語ることで、授業の視点を共有し、「生きた言葉」で協議することができた。また、県小学校理科教育研究大会に向けて、授業者だけでなく、全教職員の学びになるように、夏季休業中には全員が教材研究と指導案作成を行い、指導案検討や模擬授業を行った。そうすることで、県小学校理科教育研究大会当日では、児童を見取る視点が明確になり、深い協議を行うことができた。若手教諭の中には、教材研究の仕方や指導案作成に不安感と困り感を抱く者もいたが、他者と協力する中で、教材研究の大切さや指導案検討をする意義、何よりも「楽しさ」を実感することができたようである。</p> <p>○●緑ヶ丘中学校区の三校合同授業では、1年生や5年生を初めとして地域や友達、他者と学びを創っていく「協働的な学び」を意識して単元づくりを行うことができた。地域を巻き込むことで、学びが「自分事」となっていく、探究のサイクルを自分達で回すことができるようになってきた。4～6年生に実施した「はちの子アンケート」について、「自己調整しようとする児童」は大きな変化は見られなかったが、5年生においては、いくつかの項目に置いて肯定的評価の上昇が見られた。</p>	<p>c</p> <p>自分が自分の行動の主体であることを認識している児童が増えてきた。</p> <p>○執行部より「はちの子あいさつペコチャレ隊」を引き継ぎ、美化生活委員会であいさつを「何のために」するのかの問い直しを行った。子どもたちから「コミュニケーションの一つである。」「相手に清々しくなってもらいたい。」等の意見が出て、あいさつ運動が自分事へとなり、取り組みに対する向き合い方が向上した。</p> <p>○5年生が初リーダーとなる行事に向け、縦割り活動の6年生の姿を参考にしよう声かけをしたことにより、リーダーとはどういう存在なのか考えた。現在は、実際にリーダーとして活動し、6年生の姿を参考にし、自分達なりに下学年を引っ張っている。</p> <p>○年度当初、指示待ちであった児童が、運動会の運営に携わりたいと立候補したり、応援団の企画を自ら考えたりし、その行動を教師に受け止めてもらい実施したことで、達成感や主体感を感じ、少しずつ行事は自分たちが立ち向かっていくものであると自覚し始めた。そして、その成長を授業や学習発表会へ繋げたことで、主体性が高まり緊張感のあるものとなった。また、それを見取る教師のまなざしも、上半期を経たことで、子どもの内を見る意識が高まり、心に火をつける声かけや共に行事を創っていく姿が見られた。</p> <p>●自分達からより良い暮らしを創るために、新しい意見や思いを発していない。また、自分が自分の行動の主体であると自覚し、「自分達でやってみよう」という気持ちが高まったが、まだ教師自身が児童に任せる「怖さ」が存在し、それは、地域や保護者に「きれいな状態の姿を見てほしい」「地域や保護者の声が気になってしまう」という気持ちが根底にあると感じた。そのことで最後には教師が引っ張る姿があり、そこに子どもと教師の思いの「ずれ」が存在している。</p>	<p>d</p> <p>○1年生の防災に視点をあてたスタートカリキュラムや5年生の防災学習では、町内会の方や危機管理課、消防署などと繋がって学習を進めることができた。4年生の総合的な学習「わくわくプロジェクト」では、中央小に深く関わっておられる方々から直接話を聞くことで、自分達が多くの方々に支えられていることを実感することができた。地域の人・もの・ことと繋がる教育活動の取組が進んでいる。</p> <p>○PTAのぶんぶん隊の参加、CSやSweet主催の大人の集い場や、とんどの竹の切り出し作業、PTA有志による縄跳び台の作成など、多くの保護者が来校された。「行事を通じた関わり合いや学び合い」についてのアンケートでは肯定的評価が79%に上がってきており、わが子だけでなく、「わが子たち」という視点で児童を見守るまなざしが保護者の中にも育ってきている。</p> <p>●行事へ参加する保護者増えてきたが、2割程度の保護者はCSの一員であるという意識が低い方もおられる。</p> <p>○CS事務局やPTA本部を中心に地域行事（みどり園マルシェ、とんど祭り、ミュージックフェアなど）を企画、運営していただいた。そこに児童や卒業生がボランティアとして積極的に参加し、学校での学びを地域の中で生かし、生き生きと過ごしている姿が見られた。</p>
--	--	---	--

G 改善方策案

<p>a</p> <p>○それぞれの児童が何に興味をもっているのか、何に困っているのか、日々丁寧に見取することを継続する。学年部会で日々の暮らしの情報共有に加え、その暮らし、学級らしさがどう見えているか、何が期待できるかについて学年部で交流を深めていく。具体的には、年度初め、児童の実態から課題を共有し、「児童にどんな力をつけたいのか」「そのために何をするか」教職員同士で、語り合う場を設ける。学年経営案を学年部みんなで作成することで、それぞれの思いや意見を共有し、同じ方向性で協働できる雰囲気を作っていく。</p>	<p>b</p> <p>○安心した学級づくりが授業づくりにつながること、更には学校行事やじまんの俳句を関連付けることを教師が意識し、学級経営を行っていく。柱 a～柱 d を盛り込んだ授業創りを行っていく。</p> <p>○児童が学級・学年の「らしさ」に目を向け、自分達の思いや願いのもと、探究のサイクルを回せるような学級会、生活科、総合的な学習の時間を核として単元づくりを行っていく。一昨年度から取り組んでいるマイプラン学習の児童に学びを「託す」ということにつながり、教師の見取りの力、協働的な学びと個別最適な学びの一体化の充実の深まりも生まれるのではないかと考えられる。児童の思いや願いを教師が「伸びたい姿である」と腹をくくすることで、児童に責任も負わせることで、「自分達の取組が社会を動かす」といった本物の学びにつながるのではないかと考えられる。また、児童が地域や保護者、他者と協働し「生きた言葉」で表現することで、「自分達らしさ」を創りだしていくことにつながるのではないかと考えられる。</p>	<p>c</p> <p>○学校をより良くするためのアイデアや意見を発する場を創り、自分が暮らしを変えられるという実感をもたせる。</p> <p>○行事だから児童に任せるのではなく、日頃の生活や授業から、児童を信じ教師主体ではなく、児童主体へ移行していき、自分達で達成している実感をもたせる必要がある。また、児童と共に創っていく行事や授業に、教師や保護者や地域が自信をもち、見栄えにとられないまなざしを大人がもつことが必要である。</p>	<p>d</p> <p>○今年度行った教育活動を来年度の学年に引き継ぎ、より児童の実態に沿った学習内容を創造していく。</p> <p>○PTA や CS 事務局と連携しながら、アンケートに寄せられた意見をもとに、地域行事の振り返りを行い、大人も子どもも参加しやすい場や、大人同士が子ども理解を交流する場を増やしていく。</p>
--	--	--	---

学校の大きな方向性に照らして（問い直し）：

今年度は、教師の子どもを見る「まなざし」の研鑽を図り、一人一人の子どもの奥にある感じ方や考え方を見取り、それらが学級の関わり合いの中で深化していくことで、次第に学級の感じ方や考え方となっていくような学習集団へと成熟させていき、子どもたちの育ちを喜び合う暮らしを創りながら教師の有りようを問い直していくことで、学校経営理念「学校（地域）は子どもが育つ土壌である」を追求してきた。子どもの実態から課題を教職員同士が交流し、「どんな力をつけたいのか」「何のために行うのか」等、語り合いを通して共有することで、教職員が同じ方向性で子どもを価値付け、子どもたちと共に暮らしを創ることができるようになってきた。また、子どもたち自身が自分たちの思いや考えを生きた言葉で語ることも増えてきつつある。一方で、教職員自身が結果にこだわり、過程において子どもたちに委ねきれない部分もある等、教師の子どもを見取るまなざしが充分でなかったり、教職員と子どもたちや教職員同士の関わり方として、「ずれ」が生じ、「協働」ではなく「連携」という在り方に陥っていたりする。「ずれ」は埋めるものではなく、「ずれ」から中央小の教育を創造する協働を生み出していくことが必要であり、目指すべきことは教育活動の内に生み出される価値を探究し、追求していくことだと考える。そこで、来年度は、連携から協働へ深化していくためにも、教師と子どもだけでなく、子どもたちを取り巻く大人たち（教師も保護者も地域も）が、教育活動において「何のために行うのか」を繰り返し問い直しながら対等な立場で協働し、よりよい暮らしを共に創っていくことを目指す。



学校関係者評価を受けての改善方策（修正）

今年度の学校自己評価に対して、学校関係者評価では、全体を通して概ね「適切である」との評価であったが、評価委員から次のような意見をいただいた。

- 子どもたちの成長にはゴールはなく、「チャレンジの途中」と捉え、成果に目を向けるのではなく過程に目を向けていくことが大切なのではないか。
- 子どもをただ視覚的に見るのではなく、1人の人間として尊重し、全体を見てその子がどう伸びたがっているのかの内面やありのままの姿を見取り、教師は子どもに寄り添うとともに問い直しを繰り返しながらファシリテートしていく姿勢が大切なのではないか。
- 心揺さぶられる出来事が何気ない日常の中にもありふれてあり、そういうことこそが山場であり飛躍に繋がると考えるので、今まさに子どもたちが何を求めているのかを汲み取る子ども目線の考えが必要ではないか。

本校はこれまで、「子どもは『発達の当事者』であり、未来の大人として敬意を払うべき存在」という子ども観に照らして、教育活動を行ってきたが、子どもたちは「チャレンジの途中」であり、“今を生きる人間である”というまなざしを大切にしていくためにも次年度は子ども観を「子どもは『発達の当事者』であり、今を生きる人間として敬意をはらうべき存在」とする。引き続き、「一人一人の発達の可能性を見出しながら関わりの中で自らの根っこを太らせていく教育」を問い直し、子ども観に照らして、学校経営理念「学校（地域）は子どもが育つ土壌である」を追求していく。